

2014年（平成26年）10月9日

神奈川新聞

思いを つなぐ

横浜YMCA130

〈中〉

この夏はデング熱の蚊による感染が社会問題となったが、20年ほど前は「エイズは蚊に刺されてうつる」などの誤った知識がまかり通っていた。横浜で国際エイズ会議が開かれることになったのはそんな折だ。差別や偏見をなくしていくには正しい知識の普及が不可欠である。それなのに会議へは1人8万円もの参加費が必要とされた。知識の普及などおぼつかない。「共生」をキーワードとする横浜YMCAは、こうした事態を見通ささない。「市民版のエイズ会議を構え共生の輪を広げよう」。当時の総主事・吉村恭二さんらの呼び掛けで全国から58団体・個人が集まった。

産業貿易センターに入っていた県国際交流協会（現かながわ国際交流財団）が岩室さん、初代事務局長と会場の無償提供を申し出て

市民会議で知識普及

エイズ

くれたことも後押しとなった。イベントは60以上におよび連日500人あまりが来場。開催に尽力した医師・岩室紳也さんの講義「若者とコンドーム」では立ち見客だけでなく、床への「座り見客」まで出た。岩室さんは今も運営を支え続けている一人だ。

勲さんらが浮かぶ。そして忘れてはならないのは小児科医の広瀬誠さんの存在だ。どんな逆境にあっても場を明るくした。

参加団体が広がってましまりそうもない時には「違うからこそ集まる意味がある。いろいろな切り口があるほうが楽しい」とスタッフを励ました。行政からの支援がさして期待できない状況を「気兼ねなくいろいろなことができる」と評した。

1992年から横浜YM

1994年8月にアジアで初めて開かれた国際エイズ会議に合わせ、開催地の横浜で始まった市民参加型イベント。横浜YMCAを中心とした実行委員会が毎年1回、手弁当で運営。ことし8月の開催で20周年を迎えた。



第1回AIDS文化フォーラム in横浜で行われた岩室さんの講義「若者とコンドーム」は満員の状態で開催。市民参加や正しい知識への関心の高さを象徴した。＝1994年8月13日

CA主催のミヤンマー医療に。2004年の年の瀬にミヤンマーで活動中に倒れ不帰の人となった。しかし、「それぞれ違う一人一人を大切に」との志は今も文化フォーラムに受け継がれ、20年という息の長い活動の下地となっている。